昭和54年８月１日（第３種郵便物承認）令和６年11月26日発行（毎週火曜日）　ＡＪＵ増刊通巻第 15321 号

私たちは、自閉症という障害をもつ人たちが、彼らなりに社会の一員として自主自立をめざし、豊かな人生を生き抜くよう共に道を拓いていくことを目的としています。

ＡＪＵ
檜の里

令和６年11月26日 発行 ／ 第113号

発行人 ＡＪＵ
東海身体障害者団体定期刊行物協会
名古屋市中区丸之内３－６－43 みこころセンター4F

編　集 社会福祉法人 檜の里
〒510-1326　三重県三重郡菰野町杉谷 1573
電話（059）394 － 1595
編集責任者　山田　勉
購読料　１部 100 円
（会員の購読料は会費に含まれています）
URL　http://asakegakuen.com

企業で働く仲間

～いつまでもがんばるぞ～

すべての人びとが夢と幸せを感じる社会に！

菰野町長　**諸岡高幸**

この度、社会福祉法人「檜の里」理事長の山田勉様と、自閉症総合援助センターの「あさけ学園」施設長の近藤裕彦様が町役場に来庁され、歴史ある機関紙「檜の里」への執筆のご依頼を頂き、改めて当施設の沿革・理念等を拝見させて頂きました。

その中で私の目に強く映ったのは、「私たちにとってめざす檜とは！この問いかけを常に忘れず答えを求め続けていく！」という言葉でありました。

法人名の「檜の里」の名称は、「あすなろ学園」で療育を受けた子供たちの親が、「あすは檜になろう」と「あすなろの木」がめざしてきた檜の木が豊かに育つ里でありたいとの願いを込めて名付けられたとのことでありました。

そこで、さらに「あすなろ」と「檜」の関係を調べたところ、「あすなろ」という語源は、あすなろの木が檜よりも木が小さいことが多いため、「明日は檜になろう」という成長の意思を持っているという意味から「あすなろ」と言われるようになったことが分かり、「檜の里」を創設するにあたって、子供たちの将来を思う保護者をはじめ関係者の切実な思いを感じさせていただき、心を熱くさせて頂きました。

昭和五十六年に「あさけ学園」が開設されて以来、地域療養等拠点施設事業や地域療育等支援事業の開始やあさけ診療所の開設など、施設入所者のみでなく、広く地域の方々を対象とし、児童精神科及び心療内科の外来診療も提供いただき、皆さんの安心な生活にご尽力を頂いており、心から感謝を申し上げます。

自閉症児の人数は、一九七〇年代約五千人に一人といわれておりましたが、現在はおよそ百人に一人といわれ、その数は飛躍的に増加しており、その要因は、医療の進化により発見されることが多くなったといわれていますが、環境の変化等による増加も指摘されております。

私の孫も発達障害で、あさけ診療所にお世話になっておりましたが、生まれたときからチャイルドシートをつけると泣いて暴れ、成長をするに従い周囲の音が聞き取りにくい事や、着る服が限定されるなど、いろいろな事案が発生してきましたが、それが障がいによるものと気づかず、注意したりして孫につらい思いをさせました。その後、あさけ診療所にお世話になり、先生のご指導と薬の処方などにより普通の暮らしをさせて頂いており感謝しております。

子どもが、生まれてから成長の過程で何か気になることがあれば、早期に診療を受けることの大切さも身をもって感じさせていただいたところであります。

さて、あさけ学園は開設四十三年が経過し、保護者や入所者の皆さんも年齢が増し、発足当時とはまた違った課題に直面されていることと存じます。人は障がいの有無や生まれた環境によって普通の生活や教育が損なわれないよう、社会全体で支えなければならず、障害者基本法の目的も同様であります。

私は安全で安心な社会を実現するための表現として、皆さん方に「地域は家庭、住民は家族」と申し上げておりますが、すべての住民が家族のように思えるやさしさの心が醸成されれば、思いやりの社会が生まれ、今も世界で起こっている悲惨な戦争なども防ぐことができるのではと存じます。

私自身も、皆さんが「檜の里」を命名されたその思いを大切にさせて頂き、皆さんの幸せづくりに努めてまいりたいと存じますし、その思いが社会全体に広がり常に向上していくことをお祈り申し上げます。

家庭帰省等、利用者―家族の交流の再開に向けた保護者調査の報告

自閉症総合援助センター　あさけ学園
施設長　近藤　裕彦

○はじめに

二〇二〇年からの新型コロナウイルス感染症の流行により、あさけ学園（施設入所支援）やあさけホーム（グループホーム）においても、集団感染を防ぎ、利用者の安全な生活を守るため、家庭帰省や外出、旅行、他の外へ出かける行事を制限せざるをえない日々が続いてきました。

そんな中、今年度から危険な状態も治まってきたことを受け、利用者と家族の積極的な交流を段階的に再開しようと考えています。

しかしながら、約四年に及ぶ空白の期間は思いのほか長く、保護者の加齢に伴い、利用者を受け入れる家庭環境の変化は大きく、単純に以前と同じやり方に戻そうとするのはとても難しいと推測されます。

家庭帰省を例にあげると、学園やホームから自宅までの移動手段、距離や所要時間、送迎する方の身体状況、利用者の行動と家族の対応力のギャップをはじめ、もし帰省中に体調不良となった場合、医療機関への受診や発熱時に一週間ほどの自宅療養が可能なのかなど、ざっと見ても多くの心配な点が浮かび上がってきます。

おそらく、以前のような一～二週間にわたる、ゴールデンウィーク、お盆や年末年始などの繁忙期の一律かつ長期間の帰省は困難な家庭が大半ではないでしょうか。それに加えて、私たち職員と家族の皆様と直接お会いする機会も少ない状況が続き、相互の情報共有が十分でないのも不安材料のひとつです。

○調査の目的

これからの利用者―家族の交流について、感染症予防対策を講じながら、できる限り多様で、利用者個々に即した取り組みを進めていく前段階として、再開に向けた家族のニーズを尋ねるアンケート調査を実施しました。

○対象者

二〇二四年五月現在、あさけ学園及びあさけホームの利用者の家族五十七名に調査用紙を配布し、そのうち五十二名から回答をいただきました（回収率九十一・二％）。回答者の内訳は、父親もしくは母親三十一名、兄弟姉妹十八名、他には、義姉、叔母、成年後見人が一名ずつです。

なお、利用者の平均年齢は、あさけ学園五十四・九歳（四十一～七十四歳）、あさけホーム五十六・八歳（四十七～六十六歳）となっています。

○結果と考察

次の四項目についてお聞きしました。

①コロナ禍で利用者―家族の交流に用いた手段は何ですか？

②今後、利用者―家族の交流について、どんな手段を希望しますか？

③今後、保護者間の交流行事について、どんな内容を希望しますか？

④今後、利用者の衣類管理について、どんな手段を希望しますか？

⑴コロナ禍での交流

対面、オンライン、電話による面会のいずれか、もしくは複数を経験したと回答したのは四十二名、交流しなかったのは十名でした。また不慣れな保護者も数多く、学園やホーム側からの一方通行ではありますが、数回にわたり手紙や写真を使って家族宛てに近況を伝える機会を作り、少しでも補おうと試みてきました。

こうした中で、急を要する家族の見舞いや冠婚葬祭、本人が同行しないとできない諸手続きなどについては、機会あるたびに職員―家族間で連絡を取り合ったり、適時担当職員に申し出ていただき、タイムリーに対応する職員体制を取りました。

加えて、上記したコロナ禍で用いてきた交流の手段はすべて、今も引き続き、個々の家族に合わせて選択・使用しているところです。

⑵今後の利用者―家族の交流への希望

複数回答ですが、外泊の希望は三十名、外出二十五名、面会十八名、希望しない（未記入を含む）が五名のとおり、約九割以上の方が今後も交流を希望するという回答を得ました。

一方で、外泊期間についての回答のほとんどは一～二泊の短い日数を希望しており、両親以外が送迎を行なうとの回答が九名、他に、グループホーム利用者の家族のうち四名は、本人だけで帰宅すると回答がありました。

なお、この中には、外出だけ希望するは六名、面会だけ希望するが二名含まれています。これらの結果から、「はじめに」にも記したとおり、従来よりも短期間の外泊、あるいは外泊以外の交流手段（外出、面会、他）でないと交流が難しくなってきている現状は、多くの家族の皆様も同様に認識していることが分かりました。

⑶保護者間の交流行事に関する希望

交流行事の開催を希望すると回答があったのは八名にとどまり、他のほとんどは未記入でした。

今後の保護者会の在り方とも関連する内容なので、保護者会役員会を通じて具体的に検討していこうと思います。

⑷利用者の衣類管理に関する希望

衣替え、衣類の保管、購入や補充など、利用者の衣類管理について、できると回答したのは二十一名、難しいが十七名、未記入が十四名となっています。未記入の多くがグループホーム入所者の家族であり、その主な理由として、グループホームでは以前から本人管理が多く、保護者はあまり関与してこなかったことがあげられます。

この間、十分な予防対策を講じたり、職員が付き添って家族の見舞いや冠婚葬祭、他の行事で出かけたのは十一名を数えました。

二〇二〇年春より、家庭帰省や外出の中止、ボランティアや外部講師、保護者の皆様などの外部の方の出入りの制限が相次ぎ、利用者―家族の交流は面会と電話だけの状態に陥りました。そのうち市中に感染者が溢れ、対面での面会が難しい時期には、オンラインや電話で代替してきました。

しかしながら、オンラインに使う機器の操作に不慣れな保護者も数多く、学園やホーム側からの一方通行ではありますが、数回にわたり手紙や写真を使って家族宛てに近況を伝える機会を作り、少しでも補おうと試みてきました。

こうした中で、急を要する家族の見舞いや冠婚葬祭、本人が同行しないとできない諸手続きなどについては、機会あるたびに職員―家族間で連絡を取り合ったり、適時担当職員に申し出ていただき、タイムリーに対応する職員体制を取りました。

加えて、上記したコロナ禍で用いてきた交流の手段はすべて、今も引き続き、個々の家族に合わせて選択・使用しているところです。

⑵今後の利用者―家族の交流への希望

複数回答ですが、外泊の希望は三十名、外出二十五名、面会十八名、希望しない（未記入を含む）が五名のとおり、約九割以上の方が今後も交流を希望するという回答を得ました。

一方で、外泊期間についての回答のほとんどは一～二泊の短い日数を希望しており、両親以外が送迎を行なうとの回答が九名、他に、グループホーム利用者の家族のうち四名は、本人だけで帰宅すると回答がありました。

なお、この中には、外出だけ希望するは六名、面会だけ希望するが二名含まれています。これらの結果から、「はじめに」にも記したとおり、従来よりも短期間の外泊、あるいは外泊以外の交流手段（外出、面会、他）でないと交流が難しくなってきている現状は、多くの家族の皆様も同様に認識していることが分かりました。

⑶保護者間の交流行事に関する希望

交流行事の開催を希望すると回答があったのは八名にとどまり、他のほとんどは未記入でした。

今後の保護者会の在り方とも関連する内容なので、保護者会役員会を通じて具体的に検討していこうと思います。

⑷利用者の衣類管理に関する希望

衣替え、衣類の保管、購入や補充など、利用者の衣類管理について、できると回答したのは二十一名、難しいが十七名、未記入が十四名となっています。未記入の多くがグループホーム入所者の家族であり、その主な理由として、グループホームでは以前から本人管理が多く、保護者はあまり関与してこなかったことがあげられます。

一方で、居住棟においても、年々、保護者の衣類管理が難しくなってきており、夏冬で入れ替えた衣類の保管場所が足りなくなっているのが現状です。

○調査結果を受けて

本調査後、予防対策を講じた外泊（外出）のルール作りを進めてきました。現在、すでに数人の家族から外泊や外出の希望が寄せられていますが、とりいそぎ、急を要する家族から取り組みを始めていくことになると思います。

さらに、新しいルールのもとで、個々の利用者にとってどうしてあげれば良いのか、個々のケースごとに組み立てていく段階に入ります。

そこで、家族の皆様の「家に帰したい（会いたい）」切なる想いもしっかり共有しつつ、実際のところ、家庭で一緒に過ごす際にどうする（なる）のか、まずは職員―家族で交流（話し合い）を行ない、具体的な方向性をもって取り組んでいこうと思います。

ご協力のほどよろしくお願いします。

令和六年度　後援会費納入のお願い

社会福祉法人檜の里　後援会会長　飯田　俊司

社会福祉法人檜の里後援会活動につきましては、日頃より多大のご支援を賜り厚くお礼申し上げます。

私たちは自閉症という障害を持つ人達が、彼らなりに社会の一員として自主自立を目指し、豊かな人生を生き抜くよう共に道を拓いて行くことを目的としています。

この趣旨に賛同して会員となってくださいました皆様方には、今年度も引き続き格別のご支援ご協力をよろしくお願い申し上げます。

同封の郵便振込用紙に必要事項をご記入の上ご送金頂きたく存じます。

なお、再度のお願いになりますので、既にお振込の節は、悪しからずご容赦下さいますよう重ねてお願い申し上げます。

年会費

正会員　一口二万円以上

賛助会員　一口二千円

（何口でも結構です）

お問合せは「あさけ学園」

℡059―394―1595

二〇二四年度　永年勤続表彰

（敬称略）

○社会福祉施設功労者として菰野町社会福祉協議会から表彰されました。

赤塚　雅子

○社会福祉法人檜の里に永年にわたり勤続したとして表彰されました。

《三十五年勤続》

森嶋　久美　岩田　玲子

清水　孝幸

《二十年勤続》

奥野　里絵　廣井　昌

鈴木　京子

《十五年勤続》

坂口　詩乃　矢田　万貴

水谷　典子　伊藤　明子

《十年勤続》

松岡　優子

永きにわたりあさけ学園に尽力された功績を称えるとともに、感謝申し上げます。【編集部】

菰野町社会福祉法人連絡協議会の再始動

菰野町社会福祉法人連絡協議会は、平成二十八年四月に菰野町内六法人が参加して発足し、その後二法人が加わりました。

当協議会の目的は、地域公益活動を推進していくために、町内法人が協働し関係機関との連絡調整及び親睦を行うことで、各法人の充実発展を図り、地域貢献の一助となることでした。

取組みの始めは、「福祉相談窓口」を各法人に設置し、相談内容は障がいに限らず、児童、高齢、困窮等、福祉に係る地域住民の身近な心配事、相談事を受け付ける、というものでした。

更なる取組み方を検討する矢先、新型コロナウイルス感染症の蔓延により、当協議会の活動は一時休止状態となりました。

感染拡大から三年以上経過して、様々な制約が解かれたこの時機（令和六年七月）に、当協議会は再始動することになりました。

当面、大規模災害発生時の支援活動や福祉避難所の運営が関心事となり、継続検討となりました。

今後も地域に根ざした新たな公益活動を模索していきたいと思います。

（事務長　永久雅晴）

支援と連帯の輪・和 ⑩⓪

「食育の支援」

栄養士　太田好美

思えば、あさけ学園に入職し、利用者さんと食事を通してのお付き合いは三十数年余りになります。単純計算でも三万から四万の食事を一人当たり提供してきた事となります。

あの頃の利用者さんは、すべてにおいて療育的支援が中心で、身体機能も十分ですから、日常での活動量も多く、食事に求められるのはボリュームであったと振り返ります。

そこで、「嵩」を増やし、カロリーや栄養素に影響しない物「生野菜」「こんにゃく類」「海藻」「大豆製品」などを加え、献立にボリュームをだす工夫に奮闘したものです。

また、外食指導や帰省も頻繁にあったので、食行為の是正に繋げる食事形態も意識しました。骨付きの「肉・魚」「生の刺身」「串のついた揚げ物・煮物」手掴みの「巻き物」根気がいって箸遣いの細かい「五目○○」など。今でも食事援助は、利用者の生活支援には欠かせないものであり、支援評価につながる場面であります。

食器も、割れる陶器を使用し、リスクマネジメントに重きを置かない支援を、行っています。

そんな中、食事を楽しんでもらうために、季節の行事食以外に「お楽しみ弁当」なるものを企画し、既存の弁当箱を違う使い方で、見た目、味共に変化と意外性を出しました。

これは、ある意味では自閉症の利用者さんには「困惑弁当」となりえるプランです。一か月に一回、今でも提供し続けています。今では、決まってないことを受け入れにくい利用者さんも本当の「お楽しみ」になっているようです。

また、以前は空調設備が十分でなく、夏の作業場の昼食場所は、暑さで食欲もわかない環境でした。

そこで、「夏」向きのお弁当を「お楽しみ弁当」を生かして工夫できないかと考えました。そこで始めたのが、夏限定の「夏弁当」です。パン、麺、寿司、冷や汁、タイ風、台湾風、インド風、韓国風等々。ご当地グルメから、その時期に国内や海外で話題になった献立や食材をいろんな形態で、提供しています。

また、一日三回の食事場面は、利用者の行動変化に繋げられる可能性があるので利用したい、と支援員から要望もあり、食形態には「普通の家庭の食事」を意識しました。鍋の導入や、自分で作る手巻き寿司、オープンサンドなど利用者さんには無謀かと思うチャレンジもしてきた次第です。

健康観察では、口腔内の歯の治療（抜歯）、消化機能の変化（イレウス）（便秘）定期的な血液検査結果や体重変化から栄養学的な知見で医務や支援員へ食事の量形態を提案させて頂いています。

ここ数年はコロナ感染時の食事提供時の配慮や、あらゆる食材の高騰続きなど、予期せぬことが重なっています。平均五十歳代半ばになる利用者さんの老化を見据えた食事提供など、数々の課題に向き合っているところです。

今、まさに、次の課題に向け、支援員並び関係スタッフと連携の輪を強く持ちたいと思う次第です。

メンバー紹介 ⑨②

支援員　山下愛里（やましたあいり）

これから、よろしくおねがいします。元気にがんばります。

支援員　松岡秀樹（まつおかひでき）

コツコツ頑張りますので宜しくお願いします。

支援員　増田かおる（ますだ）

優しい先輩方に助けられ、毎日頑張っています。

調理員　二之湯裕美子（にのゆゆみこ）

四月から厨房に入りました。よろしくお願いします。

支援員　大藪健志（おおやぶたけし）

異業種からの転職ですが、全身全霊でがんばります。宜しくお願い致します。

支援員　中村正樹（なかむらまさき）

一生懸命頑張りますので、宜しくお願いします。

さんらいずホームの夏レク2024

身も心もぐったりして「何もしたくない」という気分になるような厳しい暑さの夏でした。そんな気分を少しでも吹き飛ばしたいとさんらいずホームＡ・サテライトでは、夏のレクレーションを企画し実施しました。

『さんらいずホーム夏レク２０２４～暑さをぶっとばせ！～』と銘打って「スイカ割り」を行いました。

八月下旬に実施しました。その日は、午後から少し曇り気味で「さあ今からやるぞ」と言う時になって雨が降ってきました。当初は、外で行う予定でしたが、あいにくの雨が降ってきたのでさんらいずホームのリビングに場所を変更し開催しました。

雨が降ってきても実施できるようにスイカの代わりに紙風船を用意しておきました。その紙風船を膨らませスイカの上にのせて、新聞紙で作った棒で割るという内容に変更しました。

誰が割るのかは、あらかじめ作っておいたくじ引きを一斉にみんなが引き、スイカの絵が描かれたカードが付いたくじを引いた人に決めました。みんな真剣な顔でくじを選んで、職員の「せーの」の掛け声で一斉に引っ張りました。すごく単純なものでしたが、けっこうみんなワクワクしていたようで思っている以上に盛り上がりました。

引き当てた利用者はタオルを巻いて目隠しをしました。他の仲間たちが「前、前」「もう少し右」「もう少し左」と声を掛け合いながらスイカの位置を知らせていきました。その声を頼りに目隠しをした利用者は少しずつスイカに近づき見事スイカ（上の紙風船）を割ることに成功しました。それでスイカ割り自体は終ろうとしたら他の利用者から「僕もやりたい」という声が上がり、結局参加者のほぼ全員がスイカ（紙風船）割りを行いました。

その後そのスイカを半分に切って利用者が実をくりぬいて、事前に用意しておいたフルーツミックスと合わせてカップに入れていき、そこへソーダを注いでフルーツポンチを作りました。スイカ自体がけっこう大きかったこともあり、くりぬいた他にもスイカ自体を小分けして食べることもできました。

また、サテライトから参加した利用者は世話人と共に「冷やしみたらしだんご」を作って、みんなと一緒にたべました。みんないい表情を浮かべ、楽しんでいました。

今回のレクのテーマだった「～暑さをぶっとばせ！～」は、達成できました。私たちもみんなの楽しそうな顔や姿を見て、良い意味で気分転換できました。暑さはまだまだ続きそうですが、お互いまた頑張れる糧になったと思いました。

（管理者　清水孝幸）

学園だより＊

企業で働く利用者

就労しているグループホーム、通所の利用者の暦年齢は、四十代、六十代が各一名、あとは皆五十代です。年齢的に定年後、もしくは個人の状況による離職後を考える時期が来ています。

離職してワークセンターひのきで働いている方もいるので、体力的に事業所で働くのが大変になったらひのきへ、と考えるのは自然の流れかもしれません。

ただ、離職、退職のタイミングや、その後どのような日中活動をしていけばよいのかは、簡単には決められません。会社の規約や契約内容が違いますし、利用者一人ひとりの状況も違うからです。

一年更新で働けるだけ働いてくださいと言ってくれる会社もあれば、定年制がなくなって辞めると言わない限り働けるという会社もあります。六十歳定年で退職するか、無期契約で最高六十五歳まで働くかの選択を迫られている利用者もいます。長く勤めてきた利用者が多いので、上手にサポートしてくれている事業所ばかりです。

まずは、本人の意思が一番大事です。そして、通勤を含む職場環境、本人の体力や健康状態を検討する必要があります。

昨今の気候状況は、かなり厳しいときがあります。遠距離になれば交通機関や自転車、徒歩通勤でのトラブルなどのリスクが心配です。

職場環境も、作業内容が変わっていったり、キーパーソンが交代したりします。支援の仕方もおのずと変わってきます。

何より、利用者たちが若いといえない年齢になりました。自分自身の体力や健康状態と向き合わなくてはなりません。持病を持っていたり、通院が増えたりしています。生活面でも、遅くまでテレビを観たり、遠出をしたりなどが行き過ぎると、仕事に支障が出てくるでしょう。

お金を稼いで生活費や余暇に使うことが、張り合いとなってきた人達ですが、離職しても仲間や支援者と協同して暮らしていく、物事に取り組んでいくことは変わりありません。

張り合いをなくして気持が不安定になったり、何をして良いかわからなくなったりしないよう、充実したリスタートを切れるよう、精一杯応援していきたいと思います。

（支援員　三宅光子）

こんにちは

今回は、あさけホーム利用者の加納満さんが勤めているＹＫＫ ＡＰ㈱三重工場の加藤久史さんにお話を伺いました。ウインドウラインの住宅にて生産管理をされており、加納さんとの直接のかかわりは三年目だそうです。

YKK AP 株式会社
三重工場
加藤久史さん

「こだわりはあるが、礼儀正しく、はっきりした声で挨拶をしっかりする人という印象がある。言ったことはしてくれるし、休まないので頼りにできる。繁忙期でも休まずに来てくれるので助かっている。

いろいろな人に話をしているので、工場内の誰もが知っている。また、社内ルールを理解し、きちんと守って働いてくれている。誰よりも体力があるので、働けるうちは働いて欲しい」と言ってもらいました。ありがたいお話です。

ただ、社員ではわからない部分もあるので、職員の訪問は本人にとって必要でしょうとのこと。職員が来るとちょっと引き締まった様子が見られるそうです。

これからも、元気に働き続けられるよう、加藤さんたち社員の方々と協力して支援していきたいと思います。

お話を伺えてよかったです。ありがとうございました。

（支援員　三宅光子）

還暦　加納　満さんの還暦祝い

さんらいずホームＡ加納満さんが五月に六十歳の誕生日を迎えた。そのため六月にさんらいずホームＡの利用者、サテライトの利用者、世話人、支援員で「還暦を祝う会」を開きました。

さんらいずホームＡのリビングダイニングを会場にし、みんなで飾り付けのパーツを作ったり、テーブルを運んだりして準備をしていきました。サテライトの利用者は、この日のために「お祝いのスイーツ」を作ってきてくれました。

主人公の加納満さんは、お祝い当日赤い頭巾にちゃんちゃんこと還暦祝いならではの衣装をつけてみんなの前に登場、みんなでお祝いの乾杯をしてスタートしました。

あさけ学園の生活から現在のグループホームに至るまでの「歩み」を本人のエピソードやそれに応じたコメント、また他の仲間からの話も交えて振り返りました。

あさけ学園での思い出やグループホームに移ってからの思い出、就労先での出来事など、本人から普段聞けない話を聞くことができ、みんなからも当時の思い出を聞くことができ懐かしんだり、初めて聞いた話もあり楽しむことができました。

また当日参加した人だけでなく一緒にこれまで関わってくれて支えて来てくれた職員からビデオレターとして、「お祝いの言葉」をいただきました。

以前に大変お世話になった人、今も時々会っている人たちからも懐かしい話やこれからの人生に向けてのエールを送ってもらいました。

参加した仲間、世話人、支援員からもお祝いの言葉を送りました。

会の終盤には、お祝いの贈り物を渡し、サテライトの仲間が作ってきてくれたスイーツをみんなでいただきました。スイーツの中のクッキーに今回の主人公の顔が描かれてました。若かった時の顔と現在の顔が描かれてました。どちらも特徴をとらえており、絵を描くことが得意な人だからこそ作ることができたクッキーなのだと感心しました。

最後は本人から今後に向けた抱負を披露し、今回「お祝いの会」を開いてくれた仲間たちへのお礼を込めて作ったお菓子を配り感謝の気持ちを伝えました。

さんらいずホームＡ・サテライトの利用者は六名です。今回六十歳を迎えた人が利用者の中では初めての人でした。来年迎える人、再来年迎える人が控えています。

今回の利用者も含めて外部で就労している人たちです。これからもみんな健康な限り働く気持ちを持ち続け、自分らしく生活していってほしいと思います。

私達もそんなみんなを応援し続けたいと思います。

（管理者　清水孝幸）

ワークセンターひのきの避難訓練

先日、十月七日にワークセンターひのきの避難訓練を行いました。ワークセンターひのきが主体として避難訓練を行ったのは初めてのことでしたが、利用者の皆さんは支援員の指示に従って落ち着いて避難できていました。

特にひのきの二階からの避難経路として、非常階段を使用し避難をしましたが、利用者さんにとっても今までほとんど使ったことのない非常階段でスムーズに動けるのか?と思っていましたが、みなさん慌てることなく、支援員の誘導に従って避難できていたのは良かったと思います。

一方で、見直しや改善が必要な点もありました。わかっているつもりだったが、いざやってみると上手に出来なかったり、実際に動いてみると「ここはこういう風に動いた方が良いのでは」と思う点があったりなど、実際やってみないとわからないことが多々ありました。

今回学んだ点は今後に活かし、実際の災害時に慌てることなく避難ができるよう、備えていきたいと思います。

（支援員　加納弘章）

あさけ学園のお客様

令和六年五月一日から
令和六年九月三十日まで
（敬称略）

▽田澤彰治、上島由利、田澤登代子
（白ゆりケアサービス）

編集後記

異常な迄の今夏は、入道雲が現れ強い日差しの猛暑も過ぎ去りました。

澄み切った空に赤とんぼが飛んでいて、虫たちが夜長に奏でている秋らしい季節となりました。

今号は諸岡菰野町長よりご投稿をいただきありがとうございました。

また、あさけ学園のコロナ後の動きを掲載しました。

社会福祉法人檜の里機関誌として「檜の里」の発行は、あさけ学園設立より四年遅れの昭和六十年三月に創刊され、利用者の生活を中心に行事・出来事、日本自閉症協会・全国自閉症者支援協会の動向等を記事として四十年間発行してきました。

社会福祉法人檜の里（自閉症総合援助センターあさけ学園）を今後ともご支援・ご協力を賜わりますようよろしくお願い申し上げます。

（保護者　市川　潮）